光源氏乃物うらう我はくりたしめ帝の事人自
六十六代一條院の御時相望其の帝のきけれ 我
上東門院と申せりと此はまへ乃女房式部といふ人
はくまり去方と利きされの御ゝへ去の日乃はまく
あまはさるへき物語給はらんと申させ給ひ帝の事
上東門院此の式ア給めしていかなる我来らもへきと
おほをあるせらるとれ式部申せ原ハ何ならしを絶り
いるしてまりなへと申せこたうひてとをかくも
はくりいるされよしおほせ給りけり 時ふひと別

九曜文庫

かくハいかなれハひさしく石山の観音に参
籠しあ此ものかたりをかきはしめけれハおりから十五夜の月
みつ海のおもてにうかひくまなくすみわたりけれハ人家
式部心をすましたちまちにおもひうかへしはかやうのことく
なんさひ六十余巻をかきつゝけ六十てうにかきあ
まれにも名をとゝめ給へるしるしのその帝六七代
のちと君を臣をもあはせまくハ物しきにとめつ
筆しかも見ぬしことも思ひ於物のまゝに意は深し
書は事く世俗の世に仏の文をやと思ふ心をまうかひ

あり是これいち石山の御利生なるへし有也川よ
光源氏よりあとは皆河海よりひきうつしとふハいや
まきやうらりん乃ちりにうつむすみ事ともをすまし給
されはとて大そんやまゐらすへし書は源
清書鈔ちりと見へたり其三若紫の巻をとくに
抹消侍りけるをあまりくましく書そへられ式部とめされ
紫といつ式部とはいとへるへし初めのなかに也歌
うにむらさきありけれ光源氏とは給比はし
かれありけれハかわり親王の御孫母ハ

いとう内親王と云ひし人の子なり父なる母かたもは
王孫にて人の志なきくひなしこゝめかたら世にまくき
志きし御の道有しまへたりしを源氏の大将といふ者
まやその姉なまひ業平か二條の二人乃后我おかしゆ
せしにたとへて源氏の大将うす雲の女院勝月夜の
内侍に思ひ給ひしと我書ならハしたりと云ふこと
ことなり

一 御家世間に延喜代みかとの御子にしの文の左大臣と
いふ人ふかたら人にまくまき詩奇ゑんゑんの君くらかに

世人我さして源氏の大将と法くまりにしのみ 屋乃
世とかきたる法なりし（那かされ給ひしことありまきを
さんあめに源氏の須一ノありしにこと也志川にあふと
見へたりれよそ五十四てうのうちに男女乃まれ給
しれ姉なほひを給ひし君も法もゆかめ家をも
まくなりをも法なりいまこくさ利事なくて世の
ありさ御我おしへ（そりかんか本朝を記れく人乃
ふ我法事詩奇の道をも管絵の志る屋をもなり
ハ皆り言の業ハ芸の花樹に白ひを給しふは

秋の月の千里の外まくもくらゐなるなし色ゆ
しり情ゆぬくむ人のいつまゝ此物語ハ心ゆと語さん
おほゝ源氏といふ事ハみりとことに有さとなりみこと
れかゝれたかなるをゆく人ゆなして治下と志あふ
此時ハはしめてうちゆをふ事ゆふ事なるをみなりと氏と
号ゆきれハら源氏之此物語にかきりて無しゆ
名はくる事ハ源氏ゆなしゆふ事を七歳の時也其年
高麗乃人わたりて此君ゆゑんをりめてこゝ御行をへ
をあらして光源氏となつけゆらるし也はしめハ

六十條なるを末の世と成しゆゑり大切の書をハ六條
をくりてうちの実務にこめるをしらハ今ハなるを
志るへなし殊に天十四條をいまをちう源ゆらと語之
まゝれくの名ゆ志るし源氏の目録とす
一桐壺 二箒木 并 空蟬 并 夕顔 三 若紫
并末摘花 四 紅葉賀 五 花宴 六 葵 七 榊
八 花散里 九 須磨 十 明石 十一 澪漂 并 蓬生
并関屋 十二 繪合 十三 松風 十四 薄雲 十五 槿
十六 乙女 十七 玉鬘 并 初音 并 胡蝶 并 蛍

并常芰 并篝火 并野分 并 御幸 并 蘭
并桂柱 十八梅枝 十九藤裏葉 二十若菜上下 廿一柏木
廿二横笛 并 鈴虫 廿三夕霧 廿四御法 廿五幻
二十六雲隠 此れとも末六條ハ志るひ燈ゆゑに宮治
の室藏にこめまて今の世ハ[illegible]廿六とも廿七へ
うはる也し 廿七中将 卅巻白ふ[illegible]乃文
并紅梅 并竹河 宮治十てう
一橋姫 二椎本 三角総 四早蕨 五寄木
六東屋 七浮舟 八蜻蛉 九手習 十夏浮橋

以上五十四條光源氏一部之わ[illegible]ひハ九九なとて未終ひき
よせて志るしこゝ[illegible]同様[illegible]ともそれハ[illegible]也[illegible]
宮治の十てうハ[illegible]つにかくのことく[illegible]代ハ世にそちいらま
ありかたのことくなし[illegible]ふんえて志るしこゝハ[illegible]の[illegible]も
う[illegible]ん[illegible]へ[illegible]なんと[illegible]人[illegible]とちふとも[illegible]
このいさしかふくそちひめ[illegible]也[illegible]かひなく
かくはのりてそちひある也し一大うち一をて志き
一みりに一雲のうへいはまし大裏のおとう[illegible]
[illegible]ふ也しうへとは御門のそう[illegible]也うち

とは大袁殿をいふ之大うちのかんも一かんさらめくきゆり
なり一大将一大納言一さへもんのかみ一右衛門のかみ
とは上官のくらゐ殿上人五位六位なと下官
をいふなり左右の大臣内大臣のうち名殿れとしといへり
一人大政大臣関白なとのこと文とは皇子殿そうぬ之
春文ハ世をひ皇になり為れ君なり中文とは后を共
ゆ后ハ一代に一人也女御ハ何人もなりへし内侍のかみ
せんしとのなんといふ女房ハ二のくらいなり一ひさ御
れは女事まてハ三もんの女房也かりいといふ女房を

内侍とまゐまゐ一ひ御ゆへし四らしの女房と見へたり
命婦といふ女房ハ更衣とまゐまゐ一ひ御ゆへしあもんの
御ゆとも云ふへの女殿ハ中将の命婦女御の三ゆ婦なと
あまとも云ふ婦ハそうくもんなりとも下ハ女官と
いひてゆきくおほし宋女官とハこまゐ所下ゆれ
女房之おほかた官といふ御ハ男も女も一所なり
かりとも事あまハくもんといふ也この女房の出仕を御
所ハ大もんとて御といひて為つまなりと女房のさむ
所いなりへし男のゆふりを殿上といふ内書の

御まえの四十八殿といへるみかしのまし御まへは南殿志
てんまゝ御ゆるまし御まへは清涼殿なるを弘喜殿まいらい
殿志うかりてんなるを女御さら一かしらつてまみかふ
御ふさしなる女のまえはへをみかと常におはしまはる
世うらに桐つゝ婦しはかなしつゝと相つゝまてう
此四まは日本乃名所我給ふ川されうと申雲の
上人出くさんまゝ名所の奇をよそ給ふは世ちうなるを
いふ五十四てう我なほくる事
一の巻桐壺といふとは光源氏の御母桐壺小まみ

給ひし所なり桐壺の文衣これなるをかくらは女郎
花の風になひきたるより世我ゆるなるなとひなて
此乃霧ゆゑまゝ名をもなつかしくらうなる
いとおしきさる屋き御なそひの名をこゝ絵まてなる物
ことなり
の様我かきならしはうなくいひいはるこれをも人に
まられ出りしかは帝さくひなきものにこれめりし給ふ
少れめるといふ事は御きしよくよれなりも給こし
屋うきひかためし我ひきまり帝をも桐壺乃
みかとゝ申まりそれ奇に

みなせ野の霧ふきむすぶ風の音に小萩かをとゝ

思ひこれらやまき

交城野ハ田舎の名所なれども萩はなくなりけり
やり霧姫きむすぶとは秋の夜の風ハはめなく
すきゝ雨しく吹き霧をこゝろといふなり多し此
ことゝ心をとりて哥をよみそしむる之
二巻を箒木といふことは光源氏いつれ御しく
成あひし給うちのとのゐとあれは人々二三人まいて
物かたりとせ出る事なり此ハ卯月なるを明か夏降

けもしくなるわらはなりしを此夏の夜乃志なさしめとも
まいてたゞ此夜の言葉ともいつれ思定と出る是ハ
女のよれあしきのひとんなり世中にあるものなら
ひとして手書絵前ひそのなくこかなりしことに
雨ことの上ハまれなり女男をまゐとの我妻と其の
むへき我妻姫と此ハ人とかたらと人の思とかけたるふ
ことはまれの事也かたらハまとしおとりめなりことも
心のそこなしかにて男ハ男へる女をハられにけるめら
女をまた男の心をれりしをなくとも見しおもめし

かしくくりしく光てつゝきて給へハ菱臺の文の御めいなる
そのゆかりなきたいらくむつましくて御ゐふこいとを
給て小の方に御ふめまひし也源氏
てれつゝあいはしかもえんむらされ
祿よかしひきる野邊の竹の草
祿ハ三〇とあれとも思ふむさし野の
露をけにこれ草のゆかりを我
所ゆかりとなりて慧と思つかるけのハおされかりし
ゆへなりて

并末橋花を清清しきれの作りこそて源氏の小のうち
かしまれ作りたちこのおこうしくなんいたけそく
作顔なくはるなくのひらうにさしをこしかこそ
面にを清ゆかりゆしにおくうそなりを姫りんかさへの
作のりをのとつんこゝ海ひし之源氏をなきそめまひす
くなしく思しをきれとも心程をうこしけなく雨こハ
たのむらなきやうなきてましくきれを秘らに見
をてハ誰か所なりさ海を見悪ハんと情なりを此小の
方れかはよそて和しおひあり作るのされのあるき

神うらぬるしうら行ふるきや

神うらぬるしく心ありしやといふ人ならしと

五巻花宴おふるいれの君んとしふハその物ぞとてをや

正ぞいふ人桐壺の帝南殿の桜乃君んをしこゆふ

みこそらかん達ア皆題を給ハりて文をしたるを文ハ

詩と之源氏の君春といふ文字ニ御ハまとの給ハ門戸

さへ人よ正ぞもとくその日を又をてかへしとしるかる我れと

かれ桜をかゝしてかりて御ハあとゆるを人この

笑りかゝと思ひかへして御まゝ母の後嵯の女御

大かたに菓のまゝる我ニ御しかは

霧をも人のおりまましやそ

少々此人のうらに思ひしけるゆきりこれいれの宴の所也

六巻蓑といふ出とはか義のまつりのとなしていつるまれ

なまはその日乃かさしなまことゝりわきていふ事し

源氏御供の人さへかやくとりにいて光らてか義の亦院の

ゆとしにわるまり給ひしかハ出れ給ふまんといふ人を

少々ほとひまして手かまを出公まかけ給ふかるくハ

車のうらさへ心けしやうしてのりこうきそう神くらとを

かさしけり仙をあらにれりかゆれ

八十氏人なへてなふひ我

八十氏とはお前しの人をなつてといふ所之口傳家をよむ

ならひくいてらへし

七巻榊といふことハ六條の御是所源氏をうらみて

御じまめ亦文まつまく伴勢へくてりおひしとき源氏

に榊の枝をいさしふ折くこすうしに對面なる事野の

文まてれ氣色之御是所

神垣ハ寄しの枝をなれこの御いかまつつく

おりさうれを

榊のことおほしといへとも此所ゆへ御うれとなつ事ましまう

四季　戀　述懷　無常　仁義　釈教まて多くまし源を

雜といふ神かきなりけるとよむハ神祇なるへし野の文と

いふハ帝の御むまめなとすを折ひしき時の御行家へ

今とあと俗俄まあるへし今程をうしたんやといふなり

八巻花散里といふと源氏の小の方ひとこの六條京極ハ

さるに花散里といふ所を經折ひし之花ちまは夏の

人なりゆへふこの所をハ四季のこのこにたてうひ事人へを

まへまひしも夏のまちに出御也折ひし之五月五日をまま

めつらしき雲間は無所へ源氏にたり給ふもありから
おとしきに明紙源氏
たちそ物の音紙なつかしき同とはきも
いたちなさしとを書つけとれ
九巻 須戸といふとは源氏の御兄弟薩院の女御はら
給ふ屋き女官を弘善殿の有そとのまてあらさ無け
おりし給つる女を源氏を志のたしくをほとは男も聞き
かたにおりひしゆへ無事なりけれて源氏の御まと無のいき是
ぬくして頼かなふましきとしきこへ給ふもやとひなりけれ

比梅津の国須戸の浦へおりしきおひし有なるまたしれ
来たりなりとしの三月さらまて須戸はひなり正面い
し給ひし之所弘善殿の有そとのく女房を見とめ
給ひしハ美の有明の古紙なり
照をせに曇をやらぬ君の歌の
おうり紙月歌にしてそのそなれ
と云ふ歌の心紙なるらしきこまひし之おもろ月夜の君
とも又有明の君とも有明の人とも和に分ろう事
也有所おほき中におもろ月歌の四方の矢に源氏

源氏物きくらし給ふ

入日さす峯にそなひく薄雲は

主の思ふ神りい語やまうへれ

此斎ゆへなりけし巻にかつまし給へハ茂直をもうす書れ

女院とも物り

十五槿といふことは源氏のいとこに姫君一人まし行

心にかゝ給ひつまとゆきて物ゝてか義の所にそなるも

給ひけり此巻に赤院をりいてそとのことくそこの文を

いふ前にかくて給ふ源氏書いの作つせなまてさしかへて

祈ん山路に雪へ給ふ霧かれ鶴行さは残れりく源氏

赤院の作りこへ

こしおつるの霧にすらまぬあさかほの

花のさかりハすさや志ぬらん

此斎ゆへなり

十六乙女といふことは乙女ハ天人の想名之大内ニ又節と

いふ芸会にかくらせられたる女房乃十四又斗なる成也

めて殿上まて舞をなさせらるゝを天人残すなひて志なり

そく残とのへたり又節の舞姫といふ此姫残乙女の姿と

いつり十六の巻に所云命れさるかり源氏の法ちやく
大うくの君よりのうれ夕霧の大将と申せし之多きなの方
あまたへ法ぬこ

日新まをしるかりあめや乙女子ら
なまのこ神りかけし心我

とよのなりなといふを所云命之
十七玉鬘といふとはしめ夕ほのさる有し女房源氏の
法りとまくそうなくなりぬわすなれ思しくそれ
人のうしをれし姫君は源氏むかへとせて我むまあるりと

人まはいひてかしつきかりむかへとせ給つる故源氏やうて
御對面有かたう婦るまひ思ひしらるをんふくしらし
なりてこ姫へはあまれむりしれ夕ほの事をいはさう君
出くまれ源氏

忘れたる所はそれなるまかつる
いつなるとち我そつまきつる事

所奇ゆへ玉ほうとなつ事をとり
并初音といふと正月朔日なりしれまへの法かことなる
法むまあの姫君の法方へ古葉のまつに常ほ其我くひ

御むすめ

いまはとてやどかれぬともなれきつる
まきのはしらハわれをわするな

此哥よりて姫君をも巻をもまきはしらと申すなりかり
かいのはしらといふとなりけり

十八 梅枝といふことあり此巻の姫君后になると
なり梅か枝とは春宮の御方へ女御まいらせんとの
巻より源氏の物かたりの人なり此姫君三歳にて生
なりのちにかきなし姫君文らうとして子をもちき

ちからてこの姫君を后ハときこえんとのこゝろいかめしき
御いそきなりしかハ御色きこえ給ふ事し姫君を宮に仕
姫君の御もきをなさるとて姫君入ハ世にたくひなきまてに御て
す正月のつこもりより源氏物をもあつめて心を姫君にむかひ給ひ
ものをかうかけあハせて源氏の大臣春宮にかけ奉るの御ひゝく
されはさま物をあはせいそきまいり源氏の大臣ちかうまいり
かうはかうにまいるのくるしくあるをのちきこえハ右近の大将の二所
みかのちかうかうつりて又人のうち六條院ちかくハ一番此
けうりよあのさうた源氏にみきハちかうかすれことに時

なりしよ相なりしや

十九夜のうち葉といふとちの大段右衛門姫は雲井の
鳳の姫君といふ人を夕霧の大将をむこにとり給ひしに父の
大臣の夜のうち葉をうらせんなひし故之

朝日さしに夜のうち葉のうらとけて
きみしおもはゞ四ぎこそ此ゆん

此さ本年齊の此ゆ給なり源氏のうちこはあり候
二十 ゆ葉の上夜さらへ面きとろう四十より三へ十年は
一度つゝ此賀とりて此方とりといかめしくとて所いのうちと

中将ふ老様のふりいもひなもはわかるをとりけ賞賜なり
源氏此色に四十は成給へはおうつらのうへ鬢黒の此りとよる
いかめしきからとてこひくわかる様まつらせ給ふちんのおしき
をんしてはかりけまつりし時源氏

小松をうすゑのよしひはひらもてや
野色のわかるをとしはつゝ面き

ゆうかの下此巻ゆは源氏の此ゆに朱雀院の本に当り給し
御賀のわかるの音ゆ此巻をはをゆはらもなつ本ゆう
おうつらの此兄源智といひし人姫君此ゆうをかけく

さしこ姫の所ひえの山の坂下に小野といふ山里あり
女二の宮前葉の宮とも申母は是和のちやうにはよりてこそ
ゆすゝ給ふ小野に前葉は法名をも無心なりまめ人の名も
いはしかおりしそう山里の秋のきしきことの所にれは廉さく
まみさく音はさしあはれ出ちくまは大将
山里のあはれはそふらく音こし
そらいそんなとなれこちらえて
無斉ゆつよ夕音といへり
二十四みのつとといふと紫のうへ年をかさねてなやこけり

給へは世の中ん名をく思ひ後の世のそあれくとくのことは
いとなゝ給ふ法華經を日ことに一部ゝ給ふ所ゝもなひと
いそ給く供養をさせ給ひしいかめしき法法事なれは世
そら上達ア殿上人おほくまいりこゝろのさゝ
かさるとも見法くえ事しきなりけるとは山里ものぬひめ
まてしかとれりちやうとんは明石のうへ見散里のうへなんと
おりしそれと紫の御心ゆは無変こうるやとなりしまふく
明石の御方へむらさきのうへ
おしくらぬ無明なりと浪とて

おほしめしに[illegible]